

### 三十、あのよこのよ

南無阿弥陀仏は、彼岸のすべてである。  
しかも、あのよのすべては、罪惡生死の此岸に生きてくださる。

生死の此岸にあるものを力とし、たのみとして、それで足りていると思う者、あるいは満足しきれると思う者は、彼岸のものを求めはしない。

此岸のものは、みな滅ぶものであり、あてにならぬもの、衷心の願いを満たしてくれないものであることが知られた時、人はあの世のものを求めはじめる。

彼岸は、常住であり、清浄である。

此岸は、火宅無常であり、濁悪なる穢土である。

しかし念仏の大信心は、あのよの心、仏の心が、このよに生きてくださることによつて成就するのである。ゆえに清浄であり、眞実である。

「されば本願他力に生きるとは、あのよのすべてを廻向せられて、この世に生きる」とである。

滅ぶ世に、滅ばぬものを頂いて生きるのである。

この世の心は、貪欲である。五欲の上に幸福を求めようとする。

あのよの心は大慈悲である。しかし大慈悲はこのよの衆生の業苦なくしてはあり得ない。

念仏の行者は、この大慈悲に摂取されて生きる。この世を領解しつつ。

念仏行者は、この世の業苦を抱きつつあのよのものを、この世に生きるのである。

あのよの心に立って、このよに生きる時、このよのほんとうの相がわかつてきて、このよにおちつかせていただける。

このよの心は雑多であるが、あのよの心は純一である。

彼岸への願生者が、人中の白蓮華と言われるのはそのためである。